

地域包括ケアシステムにおける薬局の中間支援機能の解明と地域密着型支援モデルの構築 — 在宅医療・高齢者支援とヘルスケア製品活用の視点から —



【中野キャンパス】薬学部 薬学科 教授

小原 道子 Obara Michiko

URL: [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)



キーワード: 地域包括ケアシステム・薬局機能・中間支援機能・在宅医療・服薬支援・ヘルスケア製品活用

研究の概要

SDGs 目標 3: すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 11: 住み続けられるまちづくりを

我が国では急速な高齢化と人口構造の変化に伴い、医療・介護・生活支援を一体的に提供する地域包括ケアシステムの深化が求められている。その中で薬局は、従来の処方箋調剤を中心とした機能に加え、住民の日常生活に最も近い医療資源として、健康相談や生活支援を含む多面的な役割を担うことが期待されている。また薬局は、医薬品のみならず、服薬補助製品や衛生材料、栄養関連製品など生活に密接に関わるヘルスケア製品の適切な使用方法を助言する拠点でもあり、医療と生活をつなぐ重要な接点となり得る。

本研究は、地域包括ケアシステムにおいて薬局が果たしうる社会的役割と機能を明らかにすることを目的とし、地域住民調査、薬局利用実態調査、事例分析などの実証的研究を通じて検討をおこなうものである。特に、孤独感や社会的孤立、服薬困難、受診控えなどの「医療と生活の狭間」に存在する課題に着目し、薬局がそれらを早期に把握し、医療・介護・福祉へとつなぐ「中間支援機能」としてどのように機能し得るかを明らかにする。

さらに、在宅医療や高齢者支援の現場における服薬支援の実態や、地域住民との日常的接点を活かした健康支援活動、行政や多職種との連携の在り方を分析するとともに、在宅療養や高齢者の生活課題を踏まえたヘルスケア製品の適切な活用や、現場ニーズに基づく生活支援製品の開発可能性についても検討する。これらの成果を通じて、薬局を核とした地域密着型支援モデルを提示し、地域特性を踏まえた薬局機能の再定義と持続可能な地域包括ケアの実装に寄与することを目指す。

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

○実学へのつながり・社会的意義

薬局は地域住民の日常生活に最も近い医療資源の一つであり、医療機関の受診や介護サービスの利用に至る以前の「病気になる前」の生活段階において生じる課題を把握し、必要な対策や支援へとつなぐ役割を担うことが期待されている。本研究では、地域住民の健康課題や生活課題の実態を明らかにするとともに、薬局が地域において果たし得る支援機能を整理し、地域包括ケアシステムの実践に資するモデルの構築を目指す。また、在宅療養や高齢者支援の現場から得られるニーズを踏まえ、服薬支援製品や生活支援製品などヘルスケア製品の適切な活用および開発の可能性についても検討し、医療・福祉・産業分野を横断した実践的研究として展開する。

○産業界・自治体へのアピールポイント

地域住民の生活課題や健康課題の実態調査を基に、薬局を核とした地域支援モデルを提案する研究であり、自治体の地域包括ケア政策や健康づくり施策への活用が期待される。また、在宅療養や高齢者支援の現場におけるニーズを踏まえたヘルスケア製品の活用・開発に関する知見を提供することにより、医療・介護分野と連携した製品開発やサービス創出への応用が可能である。

○協力可能事項

- ・地域住民を対象とした健康、生活実態調査のサポート
- ・薬局を拠点とした地域健康支援活動の企画、評価
- ・在宅医療、服薬支援に関する実践研究
- ・高齢者、在宅療養者の生活課題を踏まえたヘルスケア製品の評価および活用研究
- ・産官学連携による地域健康支援モデルの構築

○協力希望事項

- ・自治体との連携による地域住民調査および健康支援活動の実施
- ・共同研究による在宅医療、高齢者支援に関する製品開発
- ・地域薬局や医療機関との連携による実践研究フィールドの構築